

聖書の数字

NUMBERS IN THE BIBLE

ロバート D. ジョンストン著

God's Unique Design in Biblical Numbers



Robert D. Johnston

聖書の数字

ロバート・D・ジョンストン

伝道出版社

NUMBERS IN THE BIBLE

*God's Unique Design
in Biblical Numbers*

Robert D. Johnston

KREGEL PUBLICATIONS
Grand Rapids, Michigan 49501

Publisher
Evangelical Publishers
Tokyo, Japan

目 次

序 論	7
第 1 章 永遠の書物	8
第 2 章 靈感の書物	13
第 3 章 神のみわざの計画	19
第 4 章 神のみことばにおける計画	24
第 5 章 数字「1」	30
第 6 章 数字「2」	33
第 7 章 数字「3」	37
第 8 章 数字「4」	41
第 9 章 数字「5」	43
第 10 章 数字「6」	46
第 11 章 数字「7」	48
第 12 章 数字「8」	51
第 13 章 数字「9」	53
第 14 章 数字「10」	55
第 15 章 数字「11」	57
第 16 章 数字「12」	59
第 17 章 数字「40」	61
第 18 章 キリストの完全性	62
第 19 章 数理的な正確さ	70
第 20 章 この書物から益を得るために	75

まえがき

このたび、「Numbers in the Bible(聖書の数字)」の日本語訳が伝道出版社から発行されることを心から喜んでいきます。この訳書が世に出るには、神様のお働きと思われる不思議な経緯があったものと思いい、紹介します。

今から10数年前、^{と・なみ}砺波集会の特別伝道集会に、鶴見集会の塩田多三郎兄をお招きしました。そのとき私の家に泊まっていた夜の会話が、翻訳・出版への始まりだったのです。私:「C. H. M. のモーセ五書の注解書に、『3』、『5』、『7』などの数字に霊的な意味がある、と書いてあったが、どうしてわかったのでしょうか」。塩田兄:「根拠を知りたいのですか。松長兄は聖書の数字に興味がありますか」。私:「はい」。塩田兄:「今、聖書の数字を解析した本を持っています」と言われ、「聖書数理学」という訳書を取り出され、その本を私に譲ってくださいました。感謝して頂戴しましたが、その訳書には、「1」から「5」の翻訳がありませんでした。理由は、その部分の原著がなかったからとのこと。

特伝の後、その訳書を手にしながら思い出したのは、私が信仰を持って間もない昭和35年ごろ、ハンス・バウマン兄が砺波を訪問しましたが、その晩の交わりで、聖書の数字について話をされたことです。バウマン兄なら必ず「聖書数理学」原著の最初の部分を持っていると思い、塩田兄に、バウマン兄に問い合わせてもらえないか、尋ねました。オランダに帰国中のバウマン兄に塩田兄が尋ねたところ、その原著はないが、別の書物ならあると言われて塩田兄に郵送してきたものが、今回の訳書「聖書の数字」の原著だったのです。

林兄は、私との交わりとは別に、塩田兄との交わりでこの書物の翻訳を勧められ、今から10年ほど前に、すでに「聖書の数字」を訳していました。私と林兄との交わりは9年前から始まりましたが、ある時、

「聖書の数字」の話をふたりでしていたとき、「それならもう日本語に訳していますよ」と林兄が言ったので、本当に驚いたことを私は思い出します。林兄から翻訳のフロッピーを送ってもらいましたが、私のワープロ技術が未熟だったので、金ヶ作集会の藤本光夫兄がそのフロッピーを変換して下さったので、本当に助かりました。

昨年じょうのの11月、城野集会の学び会に招かれたときに、林兄と出版の話をしました。問題は版權でしたが、伝道出版社のカリー兄が尽力して下さって、出版の障害はなくなりました。旧約聖書の預言で、主イエス様の御名の一つに「不思議な助言者、力ある神」(イザヤ9:6)とありますが、今回の訳書の出版が導かれたのも、このような主様の「不思議な」導きがあったのです。

この訳書を読まれた全国の愛兄姉様が、聖書の数字が持つ霊的な意味をさらに深く広くお知りになり、聖書そのものを読む楽しみと幸いを覚える小さな助けとなればと、祈らずにはおれません。

2006年5月

砺波集会 松長 宏

序 論

大海の海底には、いまだに海洋探検家たちが足を踏み入れていない場所があるし、そのような暗黒の洞窟^{どうくつ}の内部には、驚くべき秘密が隠されていることもある。また、人知の結集である高性能の天体望遠鏡で天空の先を探ろうとしても、星々の数を決定することはできない。地中に眠る宝石も同様である。我々が確認できる宝石類はわずかであり、ダイヤモンド以上の価値を持つ原石が存在する可能性もあるわけだ。

この書物でいっしょに考える聖書も同じであろう。特に、聖書で用いられている数字については驚くべき秘密が隠されている。確かに、大昔から、聖書に用いられている数字はよく研究されてきてはいるが、同じ箇所を読んでも、読者によって捕らえ方が異なる場合もありうる。

陸軍士官学校のチャールズ・E・ストークス兄には、多くの励ましと示唆を与えてくれたことに心から感謝したい。神と聖書に対して謙虚な兄弟姉妹がこの書物を読まれて何かを得られるなら、それ以上の報いは小弟にとってありえない。

ロバート・D・ジョンストン

第1章 永遠の書物

古代東洋における伝承の一つに、不死鳥についての話がある。不死鳥は、中近東付近でおよそ500年生きた後、自らを火葬にするための薪を積み重ね、その上に身を横たえた。当然、炎に包まれて灰になるのだが、しばらくして、再び肉体といのちがその灰に新たに与えられて、この鳥は不死の象徴として生き続けているわけだ。聖書も同じである。聖書は、人間によって、薪の上に置かれるかのように批評と分析とを受けた。だが、いくら批評や分析を受けても、聖書はさらに大いなる活力を得たかのように生き続けているのである。というのは、大きな理由があるからだ。それは、聖書は人によってではなく、神によって生み出された書物であるからだ。「聖書はすべて、神の靈感によるもの」(Ⅱテモテ 3:16)であり、「御霊に教えられたことば」(Ⅰコリント 2:13)なのである。だから、聖書は単なる不死の象徴なのではなく、不死、すなわち永遠そのものである。「生ける、いつまでも変わることはない、神のことば」である(Ⅰペテロ 1:23)。

聖書批評の発端が、実に、疑惑の種を蒔き散らし始めたのである。その発端は次のようなささやきであった。「……と神は、ほんとうに言われたのですか」(創世記 3:1)。このささやきが人類史の夜明けであった。すなわち、悪魔と呼ばれる「あの古い蛇」(黙示録 12:9)が中心になって、神のみことばの真理に反逆する、つまり、聖書批判が始まったのである。「あなたがたは決して死にません。あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです」(創世記 3:4,5)。今日まで、この攻撃は止むことなく続けられている。幾世紀もの間、建造物でたとえるなら基礎となる土台から屋根の頂上に至るまで、全体的に、また部分的に、攻撃目標が定められてきたのである。

なぜ人間は聖書に反対しようとするのか。それは、聖書が人間の罪

を明らかにし、人間の知恵を愚かなものとし、人間の能力や努力を価値なきものとし、人間の誇りを^{ふんじん}粉塵とみなすからである。「人間が望んでも書けないし、書けたとしても書かない書物。それが聖書なのである」。人間は罪の告発から逃れるために、聖書に対してこのうえない嫌悪感を持ち始めたのである。そして、聖書の絶対的な権威を少しでもおとしめようと、次から次に聖書批評家に化していった。

トリーリーの証言

「ケルススは、天才的なひらめきで天文学的視点から挑戦したが、失敗した。ポルフィリオスは、哲学的な視点から挑戦したが、やはり失敗した。ルキアノスは、ギリシャの風刺文学的視点から挑戦したが、失敗した。ローマ帝国のディオクレティアヌス帝は、当時では最強の軍隊と政治力で挑戦した。すべての聖書を焼却し抹消しようとしたのである。だが、失敗した。しかし、彼はそれに屈せず、聖書を持っている者は死刑に処する、というさらに強硬な命令を出した。結果はやはり失敗だった。このようにして、人間の知恵、科学、哲学、機知、風刺、権力、残虐性の限りを尽くして聖書に立ち向かったのであるが、ご覧のように、聖書は今日もなお、さらに身近なものとして我々とともにある」。

だが、この20世紀においても、聖書への攻撃はたゆまず続いている。

ガスリーの証言

「ヒューム(スコットランドの哲学者)、ギボン(イギリスの歴史家)、ボルテール(フランスの哲学者)、プラッセ(フランスの数学者)など、あまたの天才が聖書に挑んだのであるが、その結末はご存じのとおりである。洗練された英知、鋭利な機知、練り上げられた文学、自然科学の神秘性、古代の遺跡、地球の地質学的な仕組み、そして広大なる天空に、人間は聖書を攻撃するきっかけを求めたのである。その結果はすべて失敗であった」。

その起源からも、聖書の永遠性は声高らかに唱えられる。人間が造ったものは、すべて破壊可能である。だが、聖書は神のみことばに

1. 永遠の書物

よって作られ、神の性質を受け継いでおり、よって永遠に存在するものである。確かに聖書に対しては多くの攻撃がなされているが、その攻撃対象はそれぞれの時代にとどまり続けているのだ。人間が造ってきたものはすべて、時間の経過に伴って消えていった。だが、聖書は永遠である。人の手によるものはすべて、作者の願いとしては世間の関心であってほしい、と思うものだ。だが、作者が耐え続けてほしいといくら願っても、それはいずれ忘れ去られていくものである。だが、聖書は常に世の関心のただ中に存在し続けている。というのは、主イエス・キリストの教えに関する聖言は聖書全巻をとおして真実である。「この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません」(マタイ 24:35)。今までがそうであったように、これからもそのとおりである。

カミングの証言

「シーザーの帝国は滅んだ。古代ローマの歩兵軍団は塵の中に消えた。ヨーロッパ全土を震撼させたナポレオンの怒濤も消えていった。古代エジプトの王パラオの高慢もくじかれたのである。彼らの墓であるピラミッドは、砂漠の中に日を追うごとに埋まっている。ツロは、今日では、漁師たちの網を洗うために用いる岩々になっている。シドンはその残骸すら残していない。だが、神のみことばは今も生きている。神のみことばを攻撃しようとしたものすべては、結果的には、その存続の手助けをしたにすぎなかった。人手による記念碑がいかにはかないものであるかは、歴史がそれを証明している。それに比べて、神のみことばの何と力強いことか。伝統は墓場に掘られた穴。頑固さは火をつけられた薪束。何と多くのユダが、口づけをもって真理を裏切ったことか。何と多くのペテロが、のろいをかけて真理を欺いたことか。何と多くのトマスが、真理を素直に受け入れなかったことか。だが、神のみことばは妥協なく生き続けているのである」。

神のみことばに対して、人間の抵抗は何と微小であろうか。たとえその抵抗が、公然と武装した軍隊のようであろうとも。または、高